「京都文教大学海外出張助成金」交付による海外出張報告書

2010 年 8 月 26 日提出

申 請 年 度	2010 年度　（平成 22 年度）		
所 属 学 科	臨床心理学科	**報告者・職　氏名**	准教授・平 尾　和 之
海外出張内容（種別に○）	**目的**　11th International Neuropsychoanalysis Congress への参加 **訪問国・地域**　アメリカ・シアトル　　**助成額**　235,000 円		・学　会 （発表有／無） ・調　査 ・会　議 ・セミナー
期　　間	2010 年 7 月　21 日（水）　～ 2010 年　7 月　28 日（水）		7 泊　8 日
上記出張期間の研究・調査等活動経過	7 月 23 日　・学会参加（Educational Day） 7 月 24 日　・学会参加・発表（Main Congress, Research Session, Poster Presentation） 7 月 25 日　・学会参加・発表（Main Congress, Research Session, Poster Presentation）		
研究・調査発表等概要	心理療法家と脳科学者が集まる学際的雰囲気を肌で感じながら参加した。 今年のメインテーマは「play」で、精神分析や心理療法的視点からは play の臨床的意義について、脳科学的視点からは play にかかわる脳のメカニズムについて、さまざまな発表があり、その両者の視点を突き合わせる活発な議論が行われた。 日本からの発信として、今年は「Congenital Prosopagnosia or Dissociation? – How psychotherapy works in neurological fields」というタイトルでの発表を行った。発表では、「子どもの頃から人の顔が覚えられない」という主訴で脳外科外来を受診したクライエントの心理療法過程と風景構成法を、神経心理学的視点と心理療法的視点の両面から検討し、ひとつのコラボラティブなアプローチの可能性を提案した。		
研究・調査発表等々の成果の概要	心理療法と脳科学のコラボレーションついての発表から、この学際領域における最新の知見（今回は主に play について）を得、大いに刺激されるとともに、各国の心理療法家や脳科学者との議論、交流の中から、新たなアイデア・コラボレーションの可能性が生まれてきた。我々の活動・発表については、共鳴してくれる臨床家・研究者もいたが、同時に「日本的なもの」をいかに表現し、伝えていくかについては、課題も残った。 今回の経験を、臨床実践レベルでの臨床心理学（臨床心理士）と精神医学（精神科医）の実りあるコラボレーションに結びつけていきたい。		
研究・調査等の成果発表予定	**雑誌論文：**学会で発表した paper を論文化し、国内外の雑誌に投稿する予定である。 **図書：**NPSA の入門書である『脳と心的世界』に引き続き、その事例集である「Clinical Studies in NPSA」（今回その著者らと交流）を、近日翻訳出版予定である。 **シンポジウム・公開講演会等の開催：** 今回の学会参加を踏まえ、今秋、心身臨床学研究会で講演予定である。		